

京都芸術大学芸術館二〇二三年度活動報告

前川 志織・田中 梨枝子・梶原 誠太郎

一、はじめに

京都芸術大学芸術館は、一九九七年に京都造形芸術大学芸術館として開館し、二〇一一年本学人間館ギャラリー・オーブ二階にリニューアル・オープンした大学博物館である。大学博物館とは、大学内で蓄積されてきた資料の収集・保管、継続的な利用とともに、研究・教育とその公開・発信の機能をもつ機関であるが、芸術館もこうした大学博物館としての性格を備えている。芸術館の具体的な活動目的は、「藝術立国」という本学の理念のもとで、本学の所蔵品を中心にした資料の収集・保存、調査・研究、展示、教育普及といった活動を一体的に行うことで、本学の教育・研究活動に資するとともに、その活動を学内外に公開・発信することにある¹⁾。本報告では、当館の二〇二三年度の活動について「展示活動」「教育普及活動」「外部と連携した活動」「資料登録・調査活動」「資料保存活動」の項目を立て報告する。また、その他の活動として、二〇二三年度より発足した学園美術品活用委員会と連携し進めてきた学内の美術品に関する活動についても「七、芸術館所蔵品を含む学園全体所蔵資料活用について」にまとめる。以上、芸術館の二〇二三年度の取り組みについて、写真を添えてその詳細を報告し、今後の課題とその展望について述べる。

二、展示活動

二〇二三年度は特別展示一件、コレクションを軸とした企画展示三件、教育普及活動の報告展示一件、計五件を実施した。各展示の会期と来館者数、概要については次項より時系列に記す。

(一) コレクション展Ⅰ・Ⅱ DIFFERENCE BETWEEN — 浮世絵・郷土人形 —

・会期 二〇二三年四月二二日(土)から六月三日(土)、六月一〇日(土)から七月二二日(土)



【図1】 コレクション展Ⅰ・Ⅱ 展示風景

・入場者数 前期三〇二名(開館日数 三三日間) 後期四二五名(開館日数 三六日間)

このコレクション展では、当館が所蔵する浮世絵版画と郷土人形から「同じようで、同じではない」作品六二点(浮世絵版画四〇点、郷土人形二二点)を展示した【図1】。

浮世絵版画コレクションには同じ内容ながら摺(すり)が異なる作品が含まれ、それぞれの仕上がりを見比べることができる。郷土人形コレクションにも、日本各地でつくられた同じモチーフの人形があり、いずれも個性のある表情を見せている。細部の違いによる印象の変化に着眼し企画した。

(二) サマースクール報告展

・会期 二〇二三年九月一四日(土)から一六日(日)
・主催 京都芸術大学芸術館 共催 京都芸術大学芸術教育資格支援センター
教職課程 協力 京都市北白川児童館 中山博喜
・入場者数四六三名(開館日数七日間)

八月一八日に開催したワークショップ『白地図に描くわたしたちの地球』で北白川児童館の子どもたちが制作した大きな世界地図を中心に、芸術館所蔵の



【図2】 果てしない旅 フライヤー



【図3】 果てしない旅 展示風景

環境ポスター、総合地球環境学研究所所蔵の世界の子どもたちによる環境ポスター、本学教員である中山博喜氏によるアフガニスタンの写真作品などを展示した。

(三)「環境ポスター展 地球は誰のもの」「環境ポスター展 LOOP」

- ・会期 二〇二三年一〇月二日(月)から六日(金)、一〇月一〇日(火)から一四日(土)
- ・主催 京都芸術大学芸術館 協力 京都芸術大学通信教育部 博物館学芸員課程(科目等履修)
- ・入場者数六二名(開館日数五日間)

本展では企画から展示設営まで、本学通信教育部科目等履修生が担当した。芸術館が所蔵する環境ポスター約九〇点の中から出品作品を選出し、展覧会名の決定と展示テーマの設定、壁面のレイアウト、展示作品解説文を含むキャプション類の作成、展覧会のポスターデザインなど、展覧会ができるまでの工程を受講生が分担して取り組んだ。展示の完成後には受講生によるギャラリートークも行われた。

(四)「秋季特別展 infinite journey 果てしない旅」

- ・会期 二〇二三年一〇月二八日(土)から一二月二日(土)

- ・主催 学園美術品活用委員会、京都芸術大学芸術館
- ・入場者数 五八六名(開館日数 二八日間)

本展は学園美術品活用委員会により、本学が所蔵する学園美術品、現代美術家(本学教員、芸術館所蔵作品のダイアログとして企画された【図2】【図3】)。アート作品をとおして、過去と現在をつなぎ、対話をしながら新たな未来へとつなげていく、そうした未来永劫へと続く、めくるめく「創造の旅」がテーマである。私たち人類が持つさまざまな記憶や物語を喚び起こし、鑑賞者と作品、あるいは作品と作品がつながり、次の次元へと移動していく、そのような力をもった作品を展示した。インターン生やアート・プロデュース学科の学生たちが、作品解説の執筆や広報活動、関連イベントの企画に参加した。

キュレーター 本橋弥生、梶原誠太郎

グラフィックデザイン Meander 塚野大介

インストール たま製作所 小西由悟

協力 遠藤史都、三好思実、永松紫杏、末満優名(以上四名、芸術館インターン)、

傳田結香、秋本麻帆、稲葉侑生、竹内久美子、若月彩名、村上太基

(以上六名、ASP学科学生)、前川志織

出品作家等 河野愛、神谷徹、津上みゆき、ホンマタカシ、縄文土器・土偶

(芸術館収蔵品)



【図4】 コレクション展Ⅲ フライヤー



【図5】 コレクション展Ⅲ 展示風景

(五) コレクション展Ⅲ 四つのみかた——豊原国周「市川団十郎演芸百番」
・会期 二〇二三年一月一八日(月) から二〇二四年一月一三日(土)
・主催 京都芸術大学芸術館
・企画 遠藤史都、末満優名、永松紫杏、三好思実(芸術館インターン)
・入場者数 一四五名(開館日数 一三日間)

「明治の写楽」とも呼ばれた明治期の浮世絵師・豊原国周(一八三五―一九〇〇)。江戸の名産品として発展した浮世絵は、明治期においても描き続けられ、大衆メディアの役割を担った。そうしたなか、国周は、上半身をクローズアップした迫力ある歌舞伎俳優の大首絵など、役者絵を中心に活躍した。「市川団十郎演芸百番」は、国周による晩年の錦絵シリーズで、九代目・市川団十郎(一八三八―一九〇三)の当たり役を描いたものである。国周は、団十郎の舞台姿を数多く手がけたが、大判サイズでシリーズ化されたものは本作のみである。芸術館インターン生が企画した本展は、衣装、役柄、構図、歴史(歌舞伎の時代物のうち武士という「四つのみかた」から選んだ三二点を中心に紹介した【図4】【図5】。

三、教育普及活動

(一) サマースクール

芸術館では例年、地域連携として、北白川児童館の小学生たちを招いたワークショップを行っている。今年度は八月一八日に、『白地図に描くわたしたちの地球』を実施した(2)。全体企画及びファシリテートは本学教員の染谷聡氏、由井武人氏と鷹木朗氏、教職課程で学ぶ岸田勇人氏が担当した。また企画協力者として写真に関するレクチャーを本学教員の中山博喜氏が担当した。当日は、午前、午後の二部制で開催、北白川児童館から児童約四〇名が参加した。会場には、収蔵品の環境ポスター、本学教員の中山博喜氏によるアフガニスタンの写真作品、子どもが描いた環境ポスター原画を展示した。ワークショップでは、大きな白地図に世界の子どもが描いたポスターを貼り付けたり、描画をしたり、全身を使っただけの子供たちによる世界地図制作が行なわれた【図6】。ワークショップの成果物は先述の通り「サマースクール報告展」で展示された。



【図6】 サマースクール活動風景
(2023年8月18日撮影)



【図7】 インターン生による作業風景
(2023年12月撮影)

(二) インターンシップ

本年度後期より芸術教育資格支援センターと協力し、学芸員資格課程に在籍し芸術館の活動と学芸業務に関心を持つ学生を対象に、インターンシップを実施、四名の学生を受け入れた。活動例として、本学広報誌・Webマガジン「瓜生通信」で、秋季特別展「果てしない旅」の魅力を伝える広報記事を作成、企画者である教員や展示設営担当者へのインタビューに挑戦し、企画意図や見どころ、展示のプロセスやその工夫を文章にまとめた。また冬季コレクション展「四つのみかた——豊原国周「市川団十郎演芸百番」」の企画運営も担い、学生が感じた作品の魅力を活かして作品を選定し、解説文執筆、展示レイアウト、チラシ・デザインに至るまで工夫を凝らした。いずれの活動においても、インターン生は役割分担しながら活発に議論し、意欲的に取り組むことができた。これらの経験を通して、学芸業務への理解が深まり、就職活動への意欲の向上につながることを期待している【図7】。

〈プログラムの概要〉

- 第一回 全体説明、特別展広報記事作成
- 第二回 特別展広報記事作成
- 第三回 冬季展示の企画立案



【図8】 科目等履修生の実習風景
(2023年10月撮影)



【図9】 京都の大学ミュージアム特集二
フライヤー

第四回 冬季展示の企画立案、ミニ・レクチャー「浮世絵の読み方」(講師：本学教員・石上阿希氏)

第五回 冬季展示の展示設営作業

第六回 冬季展示見学と広報、学園美術品展示作業

第七回 博物館の環境整備実践

第八回 冬季展示の撤去作業

(三) 博物館実習

通信教育部博物館学芸員課程の博物館実習(館園実習)が七月末から一〇月にかけて、芸術館と康耀堂美術館(長野)で実施され、約一八〇名の受講生を受け入れた【図8】。実習は五日間を一日程とし、合計七日程(正科生京都開講三日程、科目等履修生長野開講二日程、科目等履修生京都開講二日程)行われた。実習生の成果として、康耀堂美術館では、九月二日から十一月三〇日まで秋のコレクション展「画家の足跡」を、芸術館では、一〇月二日から六日まで「環境ポスター展 地球は誰のもの」、一〇月一〇日から一四日まで「環境ポスター展 LOOP」を開催した。博物館実習の指導は、本学教員計一八名(専任四、非常勤一四名)と、ヤマトグローバルロジスティクスジャパンの指導員計四名が担当した。

通学部学芸員課程「博物館実習Ⅱ」(館園実習)では、すべての学生が学外館での実習に参加し、芸術館では学生の受け入れはなかった。来年度は、数名の受け入れを検討している。

四、外部と連携した活動

(一) 京都・大学ミュージアム連携

芸術館は二〇一一年度より京都・大学ミュージアム連携に加盟館として参加している。「古都の暮らし」をテーマに合同展が、京都の伝統産業や芸術などを考える「京都の大学ミュージアム特集」の第二弾として、京都伝統産業ミュージアム主催で企画され、芸術館も参加し、所蔵品のうち伏見人形五点を出品した【図9】。大学ミュージアム連携の所蔵品を通して、近世から近代の京都の商家のありかたや京都のもののづくりを示そうとするもので、とくに、下嵯峨で新炭商を営んでいた小山家の文書、商売・生活の道具類に加え、京都の上京地域で出土した近世工芸品や製作具と伝世されてきた陶器や人形類を対比するという内容であった。

〈展覧会概要〉

- ・展覧会名「京都の大学ミュージアム特集二 古都の暮らし 大学コレクションから」
- ・会期 二〇二三年十一月一〇日(金)から十二月一七日(日)
- ・主催 京都伝統産業ミュージアム(株式会社京都産業振興センター)
- ・共催・企画 同志社大学歴史資料館、京都工芸繊維大学美術工芸資料館、京都産業大学ギャラリー、京都芸術大学芸術館、京都・大学ミュージアム連携
- ・会場 みやこめつせ地下一階中央西側『WEST SQUARE Window Gallery』

(二) 他大学主催の座談会への参加

京都精華大学ギャラリー「Circles」のリニューアルオープンに関連し、各大学の収蔵品を活用した取り組みについての報告と意見交換を目的とした「芸術系大学ギャラリー担当者座談会二『大学収蔵品の展示活用』」が開催された。京都精華大学ギャラリー「Circles」、京都市立芸術大学@KCUA、成安造形大学【キャンパスが美術館】の各担当者から、各大学の収蔵品を活用した取り組みについての報告があり、芸術館からは『学園美術品』の管理の現状と芸術館のあり方をめぐって」として、前川と梶原が報告を行なった。状況の異なる各大学の施設が抱える課題について共有するとともに、芸術系大学の展示施設の望ま

しいあり方を考える有意義な機会となった。

〈座談会概要〉

・日時 二〇二三年七月八日(土)

・主催・会場 京都精華大学ギャラリーTerraS・京都精華大学明窓館 四階

ラーニングコモンズ

・ゲスト 田中真吾(美術作家、成安造形大学【キャンパスが美術館】学芸員)、藤田瑞穂

(京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA チーフキュレーター、プログラムディレクター)、前川志織、梶原誠太郎

・進行 伊藤まゆみ(京都精華大学特任講師、京都精華大学ギャラリーTerraSキュレーター)

五、資料登録・調査活動

(一) データベースの整備

学園美術品・芸術館所蔵品を一括管理するために、データベース「IBMUSEUM」を導入し、登録作業を行なった。これによって、学園美術品の管理業務を円滑に行うことができるようになった。また、これまで当館所蔵品について、エクセルリストと画像データを別々に管理しており、データ整備も不十分な状況にあったが、本データベースを導入したことにより、作品の画像データと文字情報との関連づけが容易となり、複数名での同時作業が可能となった。このことにより所蔵品の情報管理とその活用環境が改善された。

〈登録件数〉

・学園美術品・教員作品四四点、卒業生作品四七点、大学関係者作品二〇点、学
外作家作品一二点

・芸術館所蔵品・郷土人形コレクション五七九点、浮世絵版画コレクション九
二三点、縄文土器コレクション二五七点、シルクロード工芸品コレクション
九〇点

(二) 資料利用

本学歴史遺産学科学生による、当館所蔵の豊原国周による浮世絵資料を対象とした卒業研究のための調査を受け入れた。研究の趣旨は、国周による幕末か

ら明治初期の作品に使用された絵の具を科学的に分析し、使用色材の変化を探るというもので、調査点数は七七点にのぼった。この学生による調査が一つの契機となり、今後、芸術館所蔵品の調査について文化財・保存修復・歴史遺産コースのゼミとの連携を図っていく予定である。

六、資料保存活動

(一) 環境整備

〈文化財IPMの導入〉

二〇二三年度後期より、文化財IPMを開始した。文化財IPM(Integrated pest management: 総合的有害生物管理)とは、文化財にとって有害な虫やカビなどの被害を未然に防ぐ保存管理体制である。文化財IPMは館内職員全員の協力のもとで行うことを推奨されており、芸術館でもIPMへの理解について職員・関係者との情報共有、来館者への啓発なども行なっている。目的は、これまでに十分に対応できていなかった芸術館の資料保存の環境の整備を行うこと、また煩雑になった実習用品や展示用工具の棚卸し、そして学芸員課程の「資料保存論」の学習の場を形成するためである。一週間に一度のペースで清掃、整理業務を行なった。実施日は以下の通りである。二〇二三年一〇月一六日、一一月一四日、二二日、二八日、一二月一日(事前調査打ち合わせのみ)、二〇二四年一月一二日(事前環境調査 一六日、二三日、三〇日、二月二〇日、三月五日、一九日。IPM活動実施に携わったのは、芸術館学芸員、通学部博物館課程履修生、通学部インターンである。

〈芸術館の立地、構造、設備について〉

「文化財(美術工芸品)保存施設、保存活用施設 設置・管理ハンドブック」(3)の基準に従い芸術館の環境について整理すると、現状と対策は次の通りである。

環境と設備の現状と問題点

- ・風除室はなく、出入口の一ヶ所は廊下に面している。廊下は二階までの吹き抜け構造を持つギャラリー・オーブに隣接する。
- ・収蔵庫は人間館二階、ただし瓜生山の斜面に立地するため、雨水が流れ込む可能性がある。

- ・外と接する壁の間に断熱性を強化する材は使用していない。
- ・収蔵庫の扉は専用のものではない。
- ・網戸や板戸との併用はしていない

環境に対する対策

- ・データーロガーによる温湿度の記録は継続的に行なっている。
- ・コンクリート躯体との間に空間を確保した二重壁を採用している。
- ・収蔵庫前室、収蔵庫の扉横にセコムキーを設置している。
- ・収蔵庫の壁は調湿機能を有する人工ボードを使用している。
- ・加湿除湿器を収蔵庫内に設けている。
- ・資料を収めるためのスチールラックを導入している。三台を背面あわせで計六台を設置、床下固定はしていないが、棚上部にバーを通してラック六台を連結させている。

〈整理〉「整頓」「清掃」「清潔」「躰」(5S) 活動の内容

事務室、展示室、受付カウンター周辺

- ・物品の分類と数の把握
- ・使用していない備品や消耗品の廃棄と譲渡
- ・展示入れ替えの度に展示室清掃を実施、入口ドア周辺の埃の除去
- ・事務室水回りの清掃と特定のゴミ置場の設定
- ・物品の保管場所の決定（販売物、清掃用品、事務作業用品、教育普及事業用品など用途目的別に置き場所を決定）
- ・受付カウンターの事務用品引き出しや貼紙類の撤去
- ・工具類、展示道具類の置き場所を一箇所まとめ、刃物など危険物を収める棚の施錠
- ・芸術館内（事務所、収蔵庫前室、収蔵庫）の備品及び消耗品の在庫管理表の作成
- ・分別ゴミの徹底と喚起掲示（学内ルール変更にあわせて情報を刷新）

収蔵庫前室

- ・不用品の廃棄、置かれていた物品の分類と移動、数量の把握
- ・床の上に置かれていた物品の撤去と整理

- ・有害虫を誘引する恐れのある（あるいは品質が劣化した）余分な梱包材や紙類の廃棄
- ・複数箇所に在庫のある物品の集約と数量の把握
- ・通信教育部博物館実習用品の棚卸しと保管場所の設定

収蔵庫

- ・酸化した梱包材など、収蔵品以外の不用品の廃棄
- ・収蔵庫の清掃、スチールラック上の埃の除去、床と壁の埃除去
- ・カビの繁殖が認められた空調機の取り外し
- ・収蔵庫内、資料の配置見取り図の作成

七、芸術館所蔵品を含む学園全体での所蔵資料活用について

今年度より、本学に展示あるいは収蔵されている作品を「学園美術品」として改めて位置づけ、それらの管理・活用を検討する学園美術品活用委員会が発足した。芸術館では委員会に協力し、これらの作品が本学に現存する経緯を改めて調査するなど、今後の管理・活用が円滑に進むための活動に積極的に取り組んでいる。「二、展示活動」の「秋季特別展 infinite journey 果てしない旅」は活用事業のひとつであり、次年度以降も本事業の継続を予定している。その他、全学的な美術品の管理と活用を目指した芸術館のこれまでの取り組みについて、その概要を次の通りに記す。

作品が学園に残された経緯は、大学関係者による購入や作家本人からの寄贈など多岐にわたる。一方で、それらの作品を「誰から」「どのようにして」受け入れたかについての記録がないものも多く、どのように扱ってよいか判断しづらいものが含まれていた。

先述の京都精華大学での座談会では、こうした学園美術品の現状について報告する機会があり、これらの作品の円滑な管理・活用のために、まず情報収集を行い、作者の同定などの基礎的な調査を順次進めていく必要性について報告した。

順次調査を進めた結果、所有権が不明であった作品の一部について、所有権を改めて確認する手続きが完了した。また作者が不明であった作品について、関係者への聞き取り調査などの結果、一部の作品について作者が判明した。今後とも継続して調査を進めることで、学園美術品活用委員会による管理が円滑に進

むと考えている。

二〇二三年度末時点で、作品九七点（学外に一時保管中）について、作家名、入経緯などの調査がほぼ完了している。うち五点は、作品関係者についての調査を継続している。

そのほか本学元教員・八幡はるみ氏の作品《Colors》一点について、二〇二二年度末から二三年度五月まで名古屋市ヤマザキマザック美術館で開催された「八幡はるみ展」への貸出対応を行なった。

八、おわりー今後の展望

今後の展望のうち、展示活動については、二〇一九年度から二二年度にかけて、コロナ禍のなかで十分な展示活動を行える状況になかったが、二二年度秋に助教の学芸員が着任したこともあり、本年度は展示活動を活発化することができた。コレクションを活かし、博物館実習とも連携したこれまでの展示のあり方を引き継ぐ一方で、学園美術品活用委員会との連携やインターン生による企画など新たな試みが加わった。こうした今年度の取り組みを継続するとともに、次年度以降には、コレクションを本学の教育・研究活動に活かす試みとして、本学教員による公募企画展の開催を目指している。二〇二四年度には、コレクションを活かした展示の具体例を示すパイロット版展示を兼ねて、本学教員と縄文土器によるコラボレーション展示を企画することで、公募企画の周知を図りたい。

なお、各展覧会の設営・撤収作業には、これまで通学部・学芸員課程の学生が多数参加している。こうした活動を継続するなかで、学生が学芸員業務の実験を体験・理解する機会を作っていきたい。

教育普及活動については、学芸員資格課程の学生による成果発表あるいはその学びを深める場として引き続き芸術館を活用し、サマースクールの実践やインターンシップの受け入れを意義あるものと考え、今後も活動を継続したい。博物館実習については、通信教育部の実習受講者数が毎年着実に増加している。今年度は開講数を増設し、二〇〇名程度を受け入れる予定で、一部の学生は芸術館での実習を受講する。

社会連携活動については、二〇二三年度の活動を通じて、大学博物館の運営、学園美術品の管理や活用について、他大学の博物館においても似たような現状

や課題があることに改めて気づく機会ともなった。今後も、京都・大学ミュージアム連携をはじめ、近隣の大学博物館と情報共有を図り、相互の交流を深めることで、当館の活動における課題の改善に活かしたい。

学園美術品に関する活動については、新校舎「相照館」の完成に伴い、新たな収蔵庫に作品を収める予定のため、安全かつ円滑に作品が移動できるよう準備を進める。また、芸術館での学園美術品を活用した展覧会企画にアートプロデュースコースの学生が参加する機会を提供するなど、本学の教育活動との連携を図る。

そのほかの管理・運営面のうち、資料データベースについては、学生アルバイトやインターン生などに協力を仰ぎ、学生にとっても学びのある作業となることを目指しながら、情報の拡充を図る予定である。文化財IPMについては、組織内で行う定期的な清掃及び点検業務と、外部の専門機関に依頼して行う環境調査を継続する。二〇二四年度は、特に収蔵庫周辺（相照館収蔵庫も含む）の環境整備を優先して行う。

最後に、博物館指定施設への登録申請にも関連して運営の安定化を図りながら、本学の教員や学生に協力を仰ぎ、小規模ながらも本学ならではの博物館活動を展開することで、博物館活動と教育・研究との往還をつくりだすことができると考えている。

註

- (1) 運営組織については、館長（通信教育部長）、通信教育部・助教（学芸員）、通信教育部教員（学芸員を兼任）、通学部教員（学芸員を兼任）が配置されており、通信教育部に事務担当部署が設置されている。
- (2) 今年度のサマースクール（ワークショップと報告展）は日本学術振興会科学研究費助成事業基盤研究C（課題番号 20K03384）の助成を受けて開催されたものである。
- (3) 文化庁文化財部美術学芸課編『文化財（美術工芸品）保存施設、保存活用施設設置・管理ハンドブック』、二〇一五年